

ハイドン盤を聴く(4)(HP 収載)
ー最新アナログシステムでの試聴(4)ー

1. 始めに

[LINN LP-12 の再構成\(35\)](#)および [ThorensTD124 の再構成\(1\)](#)で報告しましたようにこれらのアナログシステムの大幅な変更を行い、バッハ、テレマン、ヘンデル、ヴィヴァルディのアナログ盤を聴き直してきました。今回も、ハイドン盤を聴いてみることにしました。

2. ハイドンのアナログ盤の試聴方法

試聴システムは、LINN LP-12 の再構成(35)および ThorensTD124 の再構成(1)で報告したとおりであり、ハイドンのアナログ盤をレーベル毎、録音年代毎に整理して、LINN LP-12 と ThorensTD124 のいずれか、または両方で聴いていきます。その後、さらにアンチスタティックの効果(1)とアンチスタティックの効果(2)で報告したようにレコードアンチスタティックも加わり、今回も、スピーカーアキュライザーの出力側のマイナス端子に Crstal EpY-G をセットしています。また、今回も Magic Mat II の導入(2)で報告した Magic Mat II を使用しています。

さらに ZANDEN Model 120 の仮想アースが、Crystal E から Crystal E-G に代わっています。

今回は、次のハイドン盤を聴いていきます

SERAPHIM EAC3-0031

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン 交響曲第 94 番ト長調「驚愕」
交響曲第 101 番ニ長調「時計」

トーマス・ビーチャム指揮ロイヤルフィルハーモニー管弦楽団

UNICORN UNLP 1019

ミカエル・ハイドン Concert for Obligato Viola, Keyboard Instrument.
& Orchestra

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン 交響曲 B-flat Major
F.C.Adler 指揮 The Viena Orchestral Society

3. ハイドンのアナログ盤の試聴結果

SERAPHIM 盤の交響曲第 94 番「驚愕」と交響曲第 101 番「時計」は、お馴染みの曲で、前報(3)でも聴いています。ZANDEN のリストを参考に、EMT、R、第 4 時定数 Low で聴いていましたが、違和感はありません。録音年代はかなり以前と思わ

れますが、さわやかな音の演奏です。

UNICORN 盤の二つの曲は、モノラル盤であり、ZANDEN のリストにありませんので、RIAA、N、第 4 時定数 High から順に聴いていきます。音が拡散気味ですので、N→R として、RIAA からカーブを替えていきましたところ、米国盤であることから、Columbia カーブがあうようで、第 4 時定数も変えてみましたが、High のままで良さそうです。しかしながら、ジャケットを読むと New Orthophonic Curve で録音と記載されており、New Orthophonic Curve についてしらべますと、どうやら RIAA カーブのようなので、両者を聴き比べますと、Columbia カーブの方は余分な響きがのるようで、RIAA カーブが適当と判断しました。なお、モノラル盤ですので、あくまで参考と言う程度です。

ミカエル・ハイドンの Concert for Obligato Viola, Keyboard Instrument & Orchestra は、ヴィオラとピアノの協奏曲という珍しい構成で明るく快活な曲で、オブリガートヴィオラの奏法が特徴の演奏です。ヨーゼフ・ハイドンの交響曲 B-flat Major は、明るくさわやかな音の演奏です。

4. まとめ

LINN LP-12 の再構成(35)とアンチスタティックの効果(1)とレコードアンティスタティックやスピーカーアキュライザーの Crstal EpY-G と Crstal E-G や Magic Mat II の結果をトレースでき、レーベルのイコライザー特性が特定できました。

以上